『賦光源氏物語詩』を読む（一）

――桐壺・箒木・虚蟬・夕顔――

本間洋一

はじめに

管見に依れば、本書についての先行研究は必ずしも多くないようである。早くは緒方惟精氏「賦光源氏物語詩について」[1]が解題的記述を行った後に「桐壺」「虚蟬」「夕顔」「陬磨」「明石」「賦二物語作者紫式部一」の賦詩六首を採挙げ、主に『源氏物語』本文との関係について言及している。その点以下の拙稿でも大いに参考となったことは銘記しておかねばなるまいが、漢詩の訓よみや解釈、或は語彙や表現の詮索については控え目であるので、本稿では少しく言及するようにつとめることとした。猶、先行する漢詩解釈には浅野春江氏「賦光源氏物語詩の解釈一試論」[2]があるものの、その訳は余りにも簡略であり、拙稿とは解釈を異にする点も少なくないので、是非比較して戴けたらと思う。また、近年、本書の「詩序」について、後藤昭雄氏「賦光源氏物語詩序について」[3]が詳細な注解を試みられ、小野泰央氏「賦光源氏物語詩の表現形成について」[4]は『源氏物語』古注釈書との関係を中心しつつ、その表現形成について論じていて注目される。

稿者はもとより『源氏物語』の研究者ではない。ただ漢詩愛好の癖が多少あるというだけに過ぎないが、本詩群[5]をできる限りわかり易く読み説いてみたいというのが本稿の趣意である。粗漏な点もあるやも知れぬので、諸賢の御批正を賜ることができれば幸いである。

一　桐壺

有一更衣何代事　一の更衣有り何れの代にか事へけん
桐壺選入近皇明　桐壺に選ばれ入りて　皇明に近づきぬ
桑弧祥顕承恩後　桑弧の祥は顕はれぬ　恩を承けし後
華輦詔降憐病程　華輦の詔は降りぬ　病を憐びたる程
古漏推遷添別恨　古漏推遷して　別恨を添へ
秋燈挑尽砕幽情　秋燈挑げ尽くして　幽情を砕く
匪唯贈位照黄壤　唯　位を贈りて黄壤を照らすのみに匪ず
遺体冠婚礼已成　遺体の冠婚　礼已に成れり

〈七律。明・程・情・成（下平声庚韻）〉

首聯の第二句に巻名が詠み込まれ、物語の展開に沿うように詩句が詠まれていることは明らかであるが、通釈をよりわかり易くするために聊かストーリーの言辞を補い（カッコ内がそれに当たる。以下同様）一聯毎に訳すとすれば次のようになるであろうか。

いずれの御代にお仕えしていたのでしたか、一人の更衣がいらして、選ばれて後宮の桐壺に入内なさり、帝のお側近くにお仕えしたのでした。

（更衣は）帝の御寵愛をお受けになられた後に男子を身籠り出産なさるという吉祥が顕われたのです（が、一方で周囲の嫉妬憎悪に曝され、苦悩の果てに病となられたのでした）。帝は病める更衣をいよいよ哀れに愛しくお思いになるあまり、手車の宣旨まで仰せ下されたのでした（が、結局は永遠の別れをすることとなりました）。

（かくて、はかなく）時は過ぎゆき、（幽明に隔てられた）別れの恨みは弥益し、帝は秋の夜長灯火の芯を尽くして深い物思いに心を砕かれたのでした。

（そして）ただ亡き更衣の後世を弔うべく三位の位を追贈して、黄泉路を照らすよすがとされたというだけではなく、その忘れ形見（光源氏）の（十二歳の）御元服や（左大臣女葵上との）御結婚の儀も、この巻に描かれているのです。

次いで詩句の措辞について少し触れておきたい。[6]「何代」は「自レ此逢二何世一、従レ今復幾春」（庾信「道士歩虚詞」『芸文類聚』巻七八・仙道）「古墓何代人、不レ知二姓与レ名」（「続古詩十首」其二『白氏文集』巻一・〇〇六八）とある類。「事」は「孝始二於事一親、中二於事一君、終二於立一身」（『孝経』開宗明義章）「素事レ主十年、凡三千有六百日」（「不能忘情吟」『白氏文

集』巻六九・三六一〇）などを挙げるまでもなく仕える意。「選入」には「玄宗末歳初選入、入時十六今六十、（中略）憶昔呑レ悲別二親族一、扶入二車中一不レ教レ哭、皆云入内便承レ恩」（「上陽白髪人」『白氏文集』巻三・〇一三一）が容易に喚起されよう。「皇明」は「天人合応、以発二皇明一」（班固「西都賦」『文選』巻一）とある劉良注に「天意人事合応、以発二我皇大明之徳一」と見えて賢主を言い、「皇明燭如レ日、再使レ秉二王度一」（「薛中丞」『白氏文集』巻一・〇〇四八）等と用いられる。ここは勿論桐壺帝を指す。この首聯では、物語冒頭の名高い一節「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり」（①17頁1～4行）「御つぼねは桐壺なり」（①20頁4行）あたりを念頭に綴っていることは疑いない。

「桑弧」は桑で作った弓。「礼記曰。故男子生、桑弧蓬矢六、以射二天地四方一。天地四方者、男子之所レ有レ事也。故必先有二志於所レ有レ事一」（『芸文類聚』巻六〇・箭。他に『初学記』巻二二・弓、『白氏六帖』巻八・弓など参照）とある。男子出生を祝って門上などに桑弓を掛ける習慣があり、「洞房門上掛二桑弧一、香水盆中浴二鳳鸞一」（「崔侍御以下孩子三日示二其所生一詩上見レ示因以二二絶一和レ之」『白氏文集』巻五三・二四〇三）「桑弧戸上加二蓬矢一、竹馬籬頭著二葛鞭一」（「夢二阿満一」『菅家文草』巻二）などと見えるのはよく知られた例であろう。「祥顕」は吉祥（めでたいしるし）が顕現（あらわれる）する意。例えば、「周王褒上二祥瑞一表曰。（中略）若レ霧非レ霧、天道叶二至徳之符一、似レ煙非レ煙、触レ石表二嘉祥之気一」（『芸文類聚』巻九八・祥瑞）などとあって、徳にかなうと吉祥がもたらされるというのがこの時代の道理でもあった。ここは無論後に光源氏と呼ばれることになる男子の出生を指している。「承恩」は恩寵を受ける意（前掲「上陽白髪人」にも見えた）で、「君不レ見左納言右納史、朝承レ恩暮賜レ死」（「太行路」『白氏文集』巻三・〇一三四）「含レ誠欲レ報承レ恩久、発レ詠無レ堪落涙頻」（「早春内宴聴三宮妓奏二柳花怨曲一」『菅家文草』巻三）などと見える。「華輦」は「去二華輦一兮初邁」（潘岳「哀二永逝一文」『文選』巻五七）「遊二華輦一而永懐」（郭璞「流寓賦」『芸文類聚』巻二九・行旅）などとあるように立派な車（「ヨキコシナリ」『色葉字類抄』）のこと。本朝では「漢宮入内之夜、傍二華輦一而成レ歓」（大江朝綱「為二左大臣息女女御一修二四十九日一願文」『本朝文粋』巻一四・四二〇）のごとく天皇の乗輿を指すこと

少なくなく、次の「詔降」で知られるように、ここでは更衣が「手車の宣旨」を賜ったことを指す。猶、「詔降」（帝の命が下る）については、「爰降二詔書一、敦還摂レ任」（王倹「褚淵碑文」『文選』巻五六）「昨日詔下去二罪人一、今日詔下得二賢臣一」（「詔下」『白氏文集』巻六三・三〇三七）などの例もある。「憐病」は病身をあわれむ意で、帝の更衣に対する心を詠む。「同病病夫憐二病鶴一、精神不レ損翅翎傷」（「病中対二病鶴一」『白氏文集』巻二〇・一三三七）は類例。こうしてこの聯の前半は「前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ」（①18頁10～11行）を受け、後半は、更衣の病悩に依り帝が「輦の宣旨などのたまはせ」（①22頁11行）たことを背景としていることが知られよう。

「古漏」は古い漏刻（つまり古時計）という程の意。「推遷」は「推遷感二流歳一、漂泊思二同志一」（「感レ秋懐二微之一」『白氏文集』巻一〇・〇五一四）とあるように時間のたつことを言う。「四節運而推移」（潘岳「寡婦賦」『文選』巻一六）というに殆ど同じで、病を憐れまれた更衣の亡き後の時の経過を指し、物語本文中で「はかなく日ごろ過ぎて」（①26頁1行）「かくても月日は経にけり」（①34頁8～9行）「月日経て」（①37頁7行）「年月にそへて」（①41頁9行）などと繰返し表現されていることに照応するだろう。「別恨」は「好去張公子、通家別恨添」（杜甫「送二張参軍一」）とあるように別離の恨み。松浦友久氏に依れば「恨」は回復できぬ（とりかえしのつかない）強い無念を含む[7]というが、ここではまさにその通りに更衣と死別した帝の思いを言い、「悠々生死別経レ年、魂魄不二曾来入レ夢、（中略）天長地久有レ時尽、此恨綿々無二尽期一」（「長恨歌」『白氏文集』巻五・〇五九六）などという一節も喚起されよう。「秋燈」云々の句はよく知られているように「夕殿蛍飛思悄然、秋燈挑尽未レ能レ眠[8]」（「長恨歌」『和漢朗詠集』巻下・恋七八一）を意識したものであることは疑えない。場面としては「このごろ明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵」（①33頁10行）の楊貴妃の姿に亡き更衣を重ね見て、悲嘆の余り眠れぬまま「灯火挑げ尽くして起きおはします」（①36頁7行）あたりを念頭において いることになろう。「幽情」は「一觴一詠、亦以足レ暢二叙幽情一」（王羲之「蘭亭序」『芸文類聚』巻四・三月三日『初学記』同上）「地僻門深少二送迎一、披レ衣閑坐養二幽情一」（「晩秋閑居」『白氏文集』巻一三・〇六八四）「幽情独臥秋山裏、覚後恭聞五夜鐘」（嵯峨天皇「寄二浄公山房一」『経国集』巻一〇）などと

あり、風雅な心情、心静かな物思いなどかなり拡がりのある語だが、ここは帝が心穏かならず、深い悲しみにとらわれて打砕かれている情態を言うであろう。

「黄壤」はもともと「黄壤千里、沃野弥望」（潘岳「西征賦」『文選』巻一〇）の李善注に「尚書曰。雍州厥土、惟黄壤」と見えるように黄土の大地の意であるが、白詩に「長夜肯教黄壤暁、悲風不レ許白楊春」（「過顔処士墓」『白氏文集』巻一五・〇八二五）などと黄泉国の意で用いるのも一般と言って良いだろう。猶、この一句は「内裏より御使あり。三位の位贈りたまふよし、勅使来て、その宣命読むなん、悲しきことなりける。女御とだに言はせずなりぬるがあかず口惜しう思さるれば、いま一階（ひときざみ）の位をだにと贈らせたまふなりけり」（①25頁5～8行）と、更衣が葬送後三位を追贈された条をふまえる。「遺体」は今日用いる一般的な意味である亡き骸のことではない。「曾子曰。身也者、父母之遺体也。行父母之遺体、敢不レ敬乎」（『礼記』祭義）とあり、父母がこの世に残し置いた体、即ち忘れ形見の意で、光源氏を指す。「冠婚」は加冠婚礼（成人式と結婚式）のこと。「夫礼始二於冠一、本二於昏一、重二於喪祭一、尊二於朝聘一、和二於郷射一。此礼之大体也」「昏礼者、将下合二二姓之好一、上以事二宗廟一而下以継中後世上也。故君子重レ之」（『礼記』昏義）「已冠而字レ之、成人之道也」（同上、冠義）などとあって、人の生涯において行われる最も重要な儀礼とされていた。勿論この桐壺の巻では元服（十二歳。①44頁14行）婚礼（①47頁15行～48頁4行）だけでなく、御袴着（三歳。①21頁1行）や読書始（七歳。①38頁10～11行）も行われた旨記され、気品にみちた容貌のみならず、世に類なき聡明さを発揮して光源氏は人々を驚かす。正確な年令は明らかではない（読書始の後に記されてはいる）が、鴻臚館において高麗人の餞宴詩をものしたことも記される。菅原道真が始めて詩を成したのは十一歳（『菅家文草』巻一「月夜見二梅花一」詩自注）、大江匡房が詩を賦して世人から神童と称されたのも十一歳（「暮年記」）であったと言うから、光源氏はそれに匹敵するか、或は彼らをも凌ぐ才を有していたということになるのかも知れない。[9]

二　箒木

光源氏号世皆識　光源氏の号は　世皆識りたるも
箒木巻間好色新　箒木の巻の間に　好色新たなり

藤李部談彰己意　藤李部が談は　己が意を彰すも
蓬莱山喩取誰身　蓬莱山の喩へは　誰が身にか取れる
月前吹笛放遊客　月の前に笛を吹く　放遊の客
雨裏披書寓直臣　雨の裏に書を披く　寓直の臣
陰教有差今品定　陰かに差有ることを教ふ　今の品定め
品中上品欲為倫　品の中　上の品を　倫と為さんと欲す

〈七律。新・身・臣・倫（上平声真韻）〉

「桐壺」同様に巻名が首聯に詠込まれており、一聯毎に訳出すると次のようになろう。

光源氏という名を世人は皆存じておりますが、この箒木の巻に至って、その色好みぶりが初めて知られることとなるのです。

藤式部丞様のお話には御自身の考えが表われておりましたが、左馬頭様が（人の見たこともない）蓬莱山（などは人目を驚かすように描けばそれで通ってしまうなどと凡庸な絵師）に喩えられましたのは、さて一体どんな方を指して言われたものでしょうか。

（左馬頭様から出ました、十月の）月うるわしい折にぶらりと女を訪れ、笛を吹き鳴らした殿上人のお話は興味深いものでしたが、（抑こうした話は）光源氏様が臣下として五月の長雨降る宿直処に伺候し、書物を見ておりました折、（その傍の厨子にございました）書簡を頭中将様にお見せ致しました（ことから始まったことでございます）。

この只今の品定めの条を拝見致しますと、（女性の魅力については）人それぞれに違うものと人知れず教えて下さっているようですが、中流や上流どころの女性を御相手として採挙げたいところでございます。

「号」は名（呼名）のこと。「世皆識」は、「薫辛害レ目、豚魚不レ養、常世所レ識也」（嵇康「養生論」『文選』巻五三）「世知二我無レ堪、亦無二責レ我事一」（「詠懐」『白氏文集』巻六二・二九八四）というパターンで、「人皆知」に同じ。「箒」は『源氏物語』の巻名としては、巻末歌の本歌「園原や伏屋に生ふる帚木のありとて行けど逢はぬ君かな」（坂上是則『平貞文家歌合』『古今六帖』第五『新古今集』九九七）と詠まれる信濃国の園原伏屋という森にあった木の名で、その枝は箒に似て、遠くから見やられるが、近寄ると見えないという伝説の木（『河海抄』巻二）を指す。「箒」は本来は「兼名苑云。箒〈音酒〉一名簪〈祥歳反、和名波々木〉」（『和名抄』巻一六）と見えて、

竹ぼうきのこと。「好色」とは言うまでもなく色好みの意。異性に強い関心を持ち、恋愛の機微にも通じて異性を求めて行動することやそうした人物を指す。「已矣乎、吾未レ見二好レ徳如レ好レ色者一」（『論語』衛霊公）「玉為レ人、体貌閑麗、口多二微辞一、又性好レ色」（宋玉「登徒子好色賦」『文選』巻一九）などと見えるように、古くから男性の視点から用いられること少なくない。首聯は巻頭の「光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるにいとどかかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなさよ」（①53頁1～5行）あたりを受けるものだろう。譬えようもない美貌と気品に恵まれた光源氏は「いといたく世を憚りまめだちたまひける」振舞いをされているが、実は「なよびかにをかしきこと」（①53頁5～7行）もなくはなかったのだ、とやや遠慮がちに、この巻は始まる。そして、この巻の後半は空蟬との関係が詳しく記されるわけで、「好色新」はそのあたりをも意識した表現ということになるだろうか。

「李部」は吏部[10]で式部の唐名であるから藤式部丞を指す。光源氏と頭中将の女性談義に左馬頭と共に加わり、自身が文章生の頃に関係のあった博士の娘との経緯を語っている（①85頁2行～88頁13行）。相手の女は学問や分別も相当あって、世故に長け、公事にも通じていて頼りがいのある人であったが、自分には過ぎた女で、己が見透かされるのではないかとコンプレックスを抱くような存在であった。「蓬莱山」は「渤海之東有二五山一焉、（中略）五曰二蓬莱一」（『列子』湯問）「史記曰。蓬莱仙[カ]丈瀛洲、此三神山者、在二渤海中一」（『芸文類聚』巻七八・仙道）など諸書に見え神仙の居処ということになっているが、実のところは「蓬莱今古但聞レ名」（「海漫々」『白氏文集』巻三・〇一二八）ばかりで、「眼穿不レ見二蓬莱島一」（同上）、或は「難レ見如二蓬莱一」（「立秋夕涼風忽至（下略）」同上、巻六九・三五〇八）というように目にし難い想像上の伝説の地に他ならない。それを比喩に用いて品定めの議論に援用したのは「物定めの博士」（①69頁1行）よろしく饒舌に語り続ける左馬頭である（①69頁14行）。想像に任せ人の目を驚かすように描き成した絵の優劣の差はつけにくいものだが、誰でも知る現に存在する（日常身辺の）ものを描ききる程容易ならざることはなく、そこにこそ真の才が問われるものだという文脈の中で語られている（典拠として古注にも引かれる『韓非子』〈外儲説

左上〉の論旨をふまえる）。端的に言えば、相手の女性の奇抜な点や特別なポイントに目や心を奪われることなく、日常生活において実直で親しくし易く、深い心配りができる女性に尽きるということだろう。物語文中の言葉で言えば、「ただひとへにものまめやかに静かなる心のおもむきならむよるべをぞ、つひの頼みどころには思ひおくべかりける」（①65頁9～10行）ということになろうか。

月下に管絃の音響くというのは常套表現で、「月前吹笛」とある笛の場合の例を挙げるならば、「羌笛写二龍声一、長吟入レ夜清、関山孤月下、来向隴頭鳴」（李嶠「笛」）「吹レ笛秋山風月清、誰家巧作断腸声」（杜甫「吹笛」）「横笛怨二江月一、扁舟何処尋」（王昌齢「江中聞レ笛」）「却見孫村明月夜、一声牛笛断二人腸一」（韋荘「村笛」）などの例もある。「放遊」は勝手気儘にさまようこと。「子華曰、吾放遊獲レ受二知於右相武成侯段公一」（李公佐「南柯太守伝」）「老泣雖二哀痛一、虚舟似二放遊一」（「舟行五事」其四『菅家文草』巻三）などと見える。この一句は左馬頭の語る通っていた浮気な女の体験談（①78頁1行～80頁4行）を背景にしていること言うまでもない。十月の美しい月夜、さる殿上人の通う女の処へ同車して訪れたところ、何と自分の馴染みの女の家だった。残菊の月下に笛を吹きならすかの殿上人、それに応えて和琴を合奏する女。更に和歌を詠み交わす二人に、左馬頭が嫉妬を募らせるという印象的な場面である。第六句の「雨裏」は雨中に同じ。「帆開青草湖中去、衣湿黄梅雨裏行」（「送三客之二湖南一」『白氏文集』巻一六・〇九四八『千載佳句』巻下・水行九五九『和漢朗詠集』巻下・水五一二）「夏日賦二雨裏梅一」（淳和天皇詩題『文華秀麗集』巻下）などよく見える一般的語彙。「披書」は文（ふみ）をひらきみる意。「塵架多二文集一、偶取二一巻一披」（「読二鄧魴詩一」『白氏文集』巻一〇・〇四四八）「披レ書未レ巻同レ居処、捻レ薬空帰已葬時」（「傷二藤進士一呈二東閣諸執事一」『菅家文草』巻二）などは類例。但し、この物語では女とやりとりした書簡を見る意をより強く意識しているだろう。また、「寓直」は宿直すること。「禁中寓直、夢遊二仙遊寺一」（『白氏文集』巻五・〇二〇四）「中書寓直」（同巻一九・一二五五）「感殺周廬寓直者、終宵不レ寐意無窮」（嵯峨天皇「和下左衛門督朝嘉通秋夜寓二直周廬一聴二早雁一之作上」『凌雲集』）などは例の一斑に過ぎない。この一句は「長雨晴れ間なきころ」（①54頁3行）「つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所

も例よりはのどやかなる心地するに、大殿油近くて書どもなど見たまふ。近き厨子なるいろいろの紙なる文ども引き出でて、中将わりなくゆかしがれば」（①55頁3～7行）と続いてゆく場面を念頭に置いたものと言えよう。

尾聯は、この雨夜の品定めを総括して、様々な女性がいることはわかったが、中と上の両方の品の女性を採挙げて欲しかったという詩作者の思いが滲んでいるようにも思う。左馬頭の語る指喰い女や浮気な女も、また、頭中将の内気な女や式部丞の博士の女も中の品に属するもので、光源氏がこの巻の後半で関係を持つ空蟬も中の品の範疇にあり、上の品に記述が及んでいない憾みを読者なら感じるのではあるまいか。光源氏は「いでや、上の品と思ふだにかたげなる世を」（①61頁7行）、つまり、上流にも理想的な女性など稀だと思っているが、それは「おほかたの気色、人のけはひも、けざやかに気高く、乱れたるところまじらず、なほこれこそは、かの人々の棄てがたくとり出でしまめ人には頼まれぬべけれと思すものから、あまりうるはしき御ありさまの、とけがたく恥づかしげに思ひしづまりたまへる」（①91頁6～11行）葵の上を意識したものだろうか。だが、読者としては、「やむごとなく切に隠したまふべき」（①55頁15行）存在で、「さるべき隈にはよくこそ隠れ歩きたまふなれ、など言ふにも、思すことのみ心にかかりたまへれば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむ」（①94頁15行～95頁3行）と彼が恐懼する藤壺の存在こそそれとして限りない興味を喚起させずにはおかない対象だと思われてならないのではなかろうか。

三　虚蟬〈箒木并之一〉

夕闇輦車何処到　夕闇に車を輦せ　何れの処にか到る
中河東戸暫寧居　中河の東の戸に　暫し寧居せんとす
蛾眉透箔姿初見　蛾眉箔に透いて　姿初めて見え
蟬翼脱衣契更虚　蟬翼衣を脱いで　契り更に虚し
三伏漏闌風窃過　三伏の漏闌けて　風窃かに過ぎ
一枰碁罷燭猶餘　一枰の碁罷んで　燭猶し餘る
帰来召硯書歌什　帰り来りて　硯を召し　歌什を書せば
入小君懐豈捨諸　小君が懐に入る　豈に諸を捨てんや

〈七律。居・虚・餘・諸（上平声魚韻）〉

巻の名称は第四句に「蟬」「虚」に分けて詠み込まれている。聯毎に訳を記すと次のようになろうか。

夕闇の中、車を呼び寄せ（手引きの小君と共に光源氏が）どこにやって来たかと言えば、中川の東の（紀伊守の）家。（方違にかこつけて）しばしそこでくつろぐつもりなのでした。

（すると）美女の姿が御簾の隙間に透けて見え、（一たび契りを結んだものの再びは叶わず、光源氏はその）うるわしい髪の女の脱ぎ置いた薄衣に、契りの空しさをひしと噛みしめたことでした。

三伏の猛暑の折、夜も更けて、風はそっと吹き過ぎ、対局していた女達の碁も終ったとみえ、燈火は猶名残りの明かりを残していることでした。

（光源氏は小君と共に二条院に）お帰りになり、硯をお求めになって、（「空蟬の身をかへてける」云々の）歌を懐紙に遊び書きなさったのでした。その御歌を小君は自らの懐に入れましたが、それは（光源氏の姉への並々ならぬ思慕を詠まれた大切なものですから）とてもそのまま捨ておくことができなかったからなのです。

「夕闇」は『万葉集』（巻四・七〇九）にも見えるものの、漢詩では一般的ではないかも知れない。「輦」も珍しい用字に属するだろう。「輦（輦）、連車也」（『説文解字』）に依れば車を連ねる意のようだが、「輦輦〈今正。秋胎メ。又音柴、連車。サシシリゾク、又ヤヤシリゾク〉輦〈同。サショル〉」（『観智院本類聚名義抄』）とも見える。「皇輿夙駕、輦二於東階一」（張衡「東京賦」『文選』巻三）などと用いられている。薛綜注に「輦之言、却也。謂却二於東階下一、天子未レ乗之時也」とあれば、「廊の戸に御車さし寄せたり」（『源氏』若菜上）の類に通ずる表現と考えて良さそうである（或は「差レ車」〈車をつかわす〉と同じとみてよいかも知れない）。「欲レ別牽二郎衣一、郎今到二何処一」（孟郊「古別離」）「策レ騎翩々何処至、春風千里海西郷」（巨勢識人「春日餞二野柱史奉レ使存二問渤海客一」『文華秀麗集』巻上）「暁鼓鼕々何処到、南為二吏部一北尚書」（「早衙」『菅家文草』巻一）などは「何処到」の類例。「中川」（今の正親町小路南、東京極大路西のあたり）は「紀伊守にて親しく仕うまつる人の、中川わたりなる家なむ、このごろ水堰き入れて、涼しき蔭にはべる」（①92頁8行）と物語本文にあるように紀伊守邸を指す。空蟬のかたくなな態度にいよいよ心募らせる光源氏は、二人の繋ぎ役として手元に引きとった小君（空蟬の弟で十二、三歳）を促し、紀伊守が下向した機会を窺い訪

れる。「夕闇の道たどたどしげなる紛れに、わが車にて率てたてまつる。（中略）さりげなき姿にて、門など鎖さぬさきにと急ぎおはす。（中略）東の妻戸に（源氏）立てまつりて、我（小君）は南の隅の間より、格子叩きののしりて入」（①118頁12行～119頁4行）るという場面をこの首聯は詠んでいよう。「寧居」は心安らかに居ること、くつろぐ意。漢詩の拙訳では第一句からの流れを受けて光源氏を主語として解したが、勿論別解も可能である。即ち「寧居」を「うちとけたる人々のありさま」（①122頁3～4行）とみてとることもできようから、「車の仕度をさせ、光源氏はどこにゆこうとのおつもりか、それは中川の紀伊守邸、その東の戸（部屋）あたりでしばしくつろいでいる空蟬と軒端の荻のいるところである」とも解せよう。

「蛾眉」は（若い）美人（の眉）の意。「小婦独無レ事、対レ鏡画二蛾眉一」（沈約「擬二三婦一」『玉台新詠』巻五）「宛転蛾眉能幾時、須臾鶴髪乱如レ糸」（劉庭芝「代下悲二白頭一翁上」）「伝是昭君墓、埋二閉蛾眉一久」（「青塚」『白氏文集』巻二・〇一二二）「平生容色不二曾似一、宿昔蛾眉迷二自身一」（小野岑守「奉レ和二聖製春女怨一」『凌雲集』）などとよく用いられる表現で、「朝向二鸞鏡一点二蛾眉一而好二容貌一、暮取二鳳釵一画二蟬翼一而理二艶色一」（『玉造小町子壮衰書』）は次句の「蟬翼」との対例の一斑。「透箔姿初見」あたりには「窓明簾薄透二朝光一、臥整二巾簪一起下レ牀」（「早夏暁興贈二夢得一」『白氏文集』巻六七・三三六〇）という表現や、楊貴妃の「攬レ衣推レ枕起徘徊、珠箔銀屏邐迤開」（「長恨歌」）という場面が稿者には喚起されてならない。恐らくここは光源氏が碁（棊も同字）の対局をしている二女に見入るシーン、「向かひゐたらむを見ばやと思ひて、やをら歩み出でて簾のはさまに入りたまひぬ。この入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるに寄りて西ざまに見通したまへば、この際に立てたる屏風端の方おし畳まれたるに紛るべき几帳なども、暑ければにや、うちかけて、いとよく見入れらる」（①119頁7～15行）というあたりを意識したもの。二女とは勿論「母屋の中柱に側め」「濃き緒の単襲なめり、何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに小さき人のものげなき姿ぞしたる」（①120頁1～4行）空蟬と、いま一人は光源氏からまる見えだけに詳細に描写され、「白き羅の単襲、二藍の小袿だつものないがしろに着なして、紅の腰ひき結へる際まで胸あらはにばうぞくなるもてなしなり。いと白うをかしげにつぶつぶと肥えてそぞろかなる人の、頭つき額つきものあざやかに、まみ、

口つきいと愛敬づき、はなやかなる容貌なり。髪はいとふさやかにて、長くはあらねど、下り端、肩のほどきよげに、すべていとねぢけたるところなく、をかしげなる人」（①120頁6～13行）だが、「すこし品おくれたり」（①121頁6行）と評される軒端の荻である。「蟬翼」は蟬の翼のように透いて見える美しい髪、ここでは美人を指し、「嬋娟両鬢秋蟬翼、宛転双蛾遠山色」（「井底引銀瓶」『白氏文集』巻四・〇一六四『和漢朗詠集』巻下・妓女七〇七）と詠まれるのは人口に膾炙する名句。よく用いられる蟬鬢と殆ど同意だが、蟬翼として用いることで、より虫としてのイメージが強化されている。「脱衣」は勿論衣を脱ぐことで、ここでは蟬蛻（蟬脱とも。蟬のぬけがら、つまりうつせみ）を意識した表現。小君の手引きで、光源氏が空蟬の寝床に忍んで行くと、「かかるけはひのいとかうばしくうち匂ふ」（①124頁10～11行）ことに気付いた彼女は、「やをら起き出でて、生絹なる単衣をひとつ着てすべり出で」（①124頁14～15行）てしまう。光源氏は「ありしけはひよりはものものしくおぼゆれど」、初めはまさか別人とは思いもしなかった。相手が例の若い女（軒端の荻）の方だと「やうやう見あらはしたまひて、あさましけれど、人違へとたどりて見えんもをこがましく」（①123頁3～6行）、一通り情を込めて口説く。その後、契り叶わなかった空蟬の「脱ぎすべしたると見ゆる薄衣をとりて出でたまひぬ」（①127頁3～4行）という場面が背景にある。後に源氏は手元に留め置いたその小袿を、彼女が夫伊予介に従って下向する時に返却することになる。その時彼女が詠んだ惜別の歌に「蟬の羽もたちかへてける夏衣かへすを見ても音はなかれけり」（①195頁6～7行）と見えることも「蟬翼」と表現した所以なのであろう。

「三伏」は一年のうち最も暑い盛りの時。「陰陽書曰。従二夏至一後第三庚為二初庚一、第四庚為二中伏一、立秋後初庚為二後伏一。謂二之三伏一」（『初学記』巻四・伏日）とあるから、夏末から立秋前後頃を言うだろう。物語本文中では「三伏」と記されていないが、光源氏が紀伊守邸を訪れたのは確かに暑い時期であった。小君も「なぞ、かう暑きにこの格子は下されたる」（①119頁5行）と言い、屏風も端の方が畳まれ、几帳もまくり上げられて――風通しの為――いたので、胸もあらわにしどけない軒端の荻の姿も、東の妻戸あたりに居た光源氏から丸見えなのであった。「漏闌」はここでは夜更けたことを言う。「形羸自覚二朝餐減一、睡少偏知二夜漏長一」（「自歎二首」其一

『白氏文集』巻二〇・一三九五）「松寂風初定、琴清夜欲闌」（「松下琴贈客」同上巻五五・二五三二）「忘帰待明月、何憂夜漏深」（境部王「秋夜山池」『懐風藻』）などというに殆ど同じ。この一句は、光源氏が空蟬の寝床に忍び込みたい思いを抱えつつ、「夜更くることの心もとなさをのたまふ」（①123頁10行）場面で、小君は「妻戸を叩きて入る。みな人々しづまり寝」ているとみて、「この障子口にまろは寝たらむ。風吹き通せ」（①123頁11～12行）などと、とぼけて寝込むふりして光源氏を導き入れるところを念頭に置いている。次の句の「一枰碁罷」（枰は碁盤のこと）は「碁打ちはてつるにやあらむ、うちそよめく心地して人々あかるるけはひなどすなり」（①122頁15行～123頁1行）あたりをふまえるものである。「燭猶餘」は、寝たふりの小君が光源氏を手引きして寝所に入れる場面、「灯明き方に屏風をひろげて、影ほのかなるに、やをら入れたてまつる」（①123頁15行～124頁1行）に依る。二人の女性が碁をやめ、人も寝静まるものの、まだ明かりあることを言い、「燭餘減二夜漏一、衾煖添二朝睡一」（「和二夢得洛中早春見レ贈二七韻一」『白氏文集』巻六九・三五一九）などと用いられていた。

「帰来」は光源氏が軒端の荻との契りを終え、「二条院におはしましぬ」（①128頁11行）ことを受ける。彼は空蟬への思いを果たせず無念で、そばに寝かせた小君にあれこれ恨み言など言い、眠れずに起き出して、「御硯いそぎ召して、さしはへたる御文にはあらで、畳紙に手習のやうに」（「空蟬の身をかへてける木のもとになほ人がらのなつかしきかな」（①129頁11～15行）と書き流す。猶、「召硯」は和文脈的表現と言うべきか。「歌什」は「素性法師、延喜之遊徒也。所レ詠歌什、多在二人口一」（藤原有国「読二法華経二十八品一和歌序」『本朝文粋』巻一一・三四九）などと、平安朝漢文でも和歌（作品）を指す言葉として一般的であると言って良い。その歌を小君は「懐にひき入れて持たり」（①130頁1行）と、最終句に続いてゆくことになる。小君は光源氏の思いを姉に伝えたい――それは彼に求められていることでもあったが――ので、その歌を捨ておくことはできなかったのである。「捨諸」は「焉知二賢才一而挙レ之。曰、挙二爾所レ知。爾所レ不レ知、人其舎レ諸」（『論語』子路）とあるに同じ。届けられた歌は空蟬の心を千々に揺り動かす。だが、彼女は現実のわが身（現し身）を見据え、返歌するでもない歌を光源氏の歌の懐紙の端に書きつけるばかりであった。

四　夕顔〈同二〉

大弐近隣看半蔀　大弐が近き隣半蔀を看るに
遠方人使此家臨　遠方人ありて　此の家を臨ましむ
色焦薄暮置花扇　色焦したり　薄暮　花を置ける扇
響冷深更擣月碪　響冷じ　深更　月に擣つ碪
清夜微行心不繫　清夜の微行　心繫がれず
他生密契涙難禁　他生の密契　涙禁へ難し
仲秋三五天徐曙　仲秋の三五　天徐く曙けなんとし
鶏唱頻和壁蛬吟　鶏唱頻りに和す　壁蛬の吟ずるに

〈七律。臨・碪・禁・吟（下平声侵韻）〉

これ迄の三首とは違い、本詩では巻名は直には詠み込まれていない。聯毎の訳を記せば次のようになろうか。

（光源氏が病気見舞に訪れた）大弐の乳母宅の（西の）お隣り、（桧垣をめぐらした宅の）開け放たれた半蔀を眺めやると、そちらの（美しい女の）方々が、この家をご覧なさいとばかりに目に入ってきたのでした。

白い扇に香をたきしめ、薄暮の意を持つ夕顔の花をその上に置き、（女の童が光源氏様に差上げたのでしたが、それは一入光源氏様がその花に興味を寄せられたからでした）。

（そして、中秋の）夜更け（訪れたその女の五条の住居で）月下擣衣のやかましい音に興ざめな思いをなさったのでした。

（また、）さやけき夜に光源氏様は自由気儘なお忍び歩きをなさり、（その方とめぐり会って契り、この世のみならず）来世迄もと、ひそかに御約束なさったものの、（結局は叶わず）涙こらえ難い思いをなさったのでした。

（あの運命の）仲秋の十五夜がゆっくりと明けゆこうという頃、鶏の声が壁際に鳴くコオロギの音に調和しているように思え（切なく）てならないことでした。

首聯は夕顔の巻冒頭の「六条わたりの御忍び歩きのころ、内裏よりまかでたまふ中宿に、大弐の乳母のいたくわづらひて尼になりけるとぶらはむとて、五条なる家たづねおはした」（①135頁1～4行）る時、光源氏が「むつかしげなる大路のさまを見わたしたまへるに、この家のかたはらに、桧垣とふもの新しうして、上は半蔀四五間ばかり上げわたして、簾などもいと白う涼しげなるに、をかしき額つきの透き影あまた見えてのぞく」（①135頁6～9行）場面を詠むもの。「遠方人」は、その家

の板塀に心地良さそうに這いかかる白い花（夕顔）を目にした光源氏が、古歌「うちわたす遠方人にもの申すわれそのそこに白く咲けるは何の花ぞも」（『古今集』一〇〇七・読人不知）を思い起こし一人口ずさむ部分（①136頁5～7行）に依ることは言うまでもない。

　頷聯の第三句は前聯を受ける。歌を口ずさんだ源氏に、随身が「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めきて、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」（136頁8～9行）と答え、「一房折りてまゐれ」（①136頁13行）との命で内に入り花を手折る。すると、遣戸口に女童が現われ、「白き扇のいたうこがしたる」を差出して、「これに置きてまゐらせよ。枝も情なげなめる花を」（①137頁1～3行）と光源氏に奉らしめるという展開に対応する。後に夕顔と呼ばれる女が彼の寵愛を受ける伏線としての重要な意味を持つ場面である。「薄暮」は暮れなずむ頃、夕方のことで漢詩でも「東皐薄暮望、徙倚欲二何依一」（王績「野望」）「薄暮青苔巷、家僮引レ鶴帰」（「西風」『白氏文集』巻五八）「滋叢唯泣早朝露、古木空浮薄暮煙」（小野岑守「奉レ和レ傷二右衛大将軍坂宿祢一」『凌雲集』）などよく用いられる語だが、ここでは夕顔の巻名をひそませていよう。ただ香を深くたきしめた白い扇を「薫」を用いず「焦」で表現しているのには違和感を禁じえない。「こがす」という字面に引かれて、意味を生かせなかったのではないかと思うのは稿者だけであろうか。第四句は、光源氏が中秋の明月の夜に夕顔の家を訪れた時、暁近くに隣近所の卑しい男達の会話や唐臼などの騒々しい物音を厭わしく思いつつも、「白袴の衣うつ砧の音もかすかに、こなたかなたに聞きわたされ、空とぶ雁の声とり集めて忍びがたきこと多かり」（①156頁13～14行）と、秋の悲哀感にたえかねている条をふまえる。「響冷」はここでは冴えて響きわたる砧の音をより意識して言うのであろう。もっとも、後の光源氏の記憶には少し齟齬があるようである。それは、夕顔亡き後、病から癒えた彼が、この折のことを「耳かしがましかりし砧の音を思し出づるさへ恋しくて、正に長き夜（白居易「聞二夜砧一」詩）とうち誦じて」（①189頁6～8行）と想い起こしたり、命婦に末摘花への手引を促しながら「かの砧の音も耳につきて聞きにくかりしさへ、恋しう思し出でらるる」（①277頁3～5行）などと、砧の音をかなり耳障りでうるさいものと記しているからである。また、「深更」は「心恨三深更向二暁天一」（「就二花枝一」『菅家文草』巻五）とあり、夜更け、夜半

の意。だが、既述したように、物語中では夜も果てなんとする暁近い時刻設定である。もっとも「擣処暁愁閨月冷」（藤原篤茂「聞二風疎砧杵鳴一」『和漢朗詠集』巻上・擣衣三四七）などと見えるように一晩中擣衣し続ける音を耳にして暁方に到ったという含意なのかも知れない。ともあれ物語のように月下擣衣に雁を配する詩句も一般的で「北斗星前横二旅雁一、南楼月下擣二寒衣一」（劉元叔「妾薄命」『和漢朗詠集』巻上・擣衣三四六）「雪中断尽幽人夢、霜後添来旅雁声」（藤原友房「月前聞二擣衣一」『新撰朗詠集』巻上・擣衣三三〇）などと見えて、イメージの重なりが思いやられよう。

「清夜」は澄んだ静かな夜。「可レ憐清夜与レ誰同、歓娯牢落中心少、（中略）白鬚人立月明中」（「杪秋独夜」『白氏文集』巻六七・三三八四）「偶迎二清夜一引二良朋一、満月光多空碧澄」（一条天皇「清夜月光多」『本朝麗藻』巻上）などと見える。「微行」は「出有二微行之游一、入有二管絃之歌一」（呉質「答二魏太子一牋」『文選』巻四〇）とある李善注に「漢書曰。武帝微行私出。張晏曰、騎出二入市里一、若二微賤之所一為。故曰二微行一」、劉良注に「微行、謂二微服而行一也」などとあり、身をやつして出かけること。ここでは光源氏の「忍び歩き」（①135頁1行）を言う。夕顔は彼の忍び歩きの過程で見出された女に他ならない。その点で言えば、稿者は先の武帝の例より、成帝の「始為二微行一出」（『漢書』成帝紀）の背景、即ち「前漢飛燕、成帝趙皇后也。初生父母不レ挙、三日不レ死。乃収養レ之。及レ壮属二河陽（陽阿）公主家一、学二歌舞一。帝微二行主家一、見而悦レ之、召入レ宮、立為レ后。（中略）二人（飛燕とその妹）並色如二紅玉一也矣」（『附音増広古注蒙求』飛燕体軽）という好ましからざる故事を想起してしまう。それはともあれ、「八月十五夜、隈なき月影、隙多かる板屋残りなく漏り来」（①155頁9～10行）る夕顔の住居から、「いざただこのわたり近き所に心やすくて明かさむ」（①157頁12～13行）と光源氏は誘う。そして、「他生密契」（「他生」は元白詩にもよく見える語）、即ち「この世のみならぬ契りなどまで頼めたまふ」（①157頁15行～158頁1行）思いを歌に込め口説いて、荒れ果てた邸に連れ込む。だが、結局夕顔は物怪にとり殺され、ひどく動揺した光源氏は急ぎ惟光を召すや緊張がはじけて「いといたくえもとどめず泣きたまふ」（①170頁11行）有様であった。「風月能傷二旅客心一、就中春尽涙難レ禁」（「春尽」『菅家文草』巻三）は同様の措辞になる。猶、「心不繋」は「尽日望レ雲心不レ繋、有レ時見レ月夜正閑」（元稹

「幽棲」『千載佳句』巻下・幽居一〇一一『和漢朗詠集』巻下・雲四〇五）のように自由気儘な様。「巧者労而知者憂、無能者無レ所レ求、食而遨遊、汎若二不レ繫之舟一、虚而遨遊者也」（『荘子』列御寇）をふまえる表現であることはよく知られるが、その本来の意の「虚心になって思うままに遊ぶ」ことからは程遠く、纜の解かれた波間の小舟のように好色心のままにあちこち浮かれ歩く光源氏であった。

尾聯は、光源氏が八月十五夜に夕顔の家を訪れた場面に戻る。「暁近くなりにけるなるべし」（①155頁11行）「明け方近うなりにけり」（①158頁6行）あたりの微妙な時間の推移が「天徐曙」あたりに反映するかも知れない。「遅々鐘鼓初長夜、耿々星河欲レ曙天」（「長恨歌」『千載佳句』巻上・秋夜一八六『和漢朗詠集』巻上・秋夜二三四）「枕上用レ心天未レ曙、北風吹出禁中鐘」（章孝標「秋夜旅情」『千載佳句』巻上・閑夜三二一）は措辞類例。第四句の当該場面の後に続く条には、光源氏が遣戸を開け、女と共に庭先を見渡すシーンがある。「されたる呉竹、前栽の露はなほかかる所も同じごときらめきたり。虫の声々乱りがはしく、壁の中のきりぎりすだに間遠に聞きならひたまへる御耳に、さし当てたるやうに鳴き乱るるを、なかなかさま変へて思さるる」（①157頁1～5行）というところが末句と関わることになる。「鶏唱頻和」に関わる物語本文はこの前後にはない。むしろ、「明け方も近うなりにけり。鶏の声などは聞こえで」（①158頁6行）とある（まさか、詩作者は「聞こえて」と解したわけでもあるまい）。夕顔巻で鶏声が出てくるのは、廃院で女が物怪にとり殺された夜明け方、光源氏が不安な思いで「からうじて鶏の声はるかに聞こゆるに」（①169頁11行）と見える以外にはない。一応これをふまえたものと考えて良いだろうが、単に夜明け方を言う為の措辞の可能性も否定できない。「鶏唱」（唱は仄声）は「鶏鳴」（鳴は平声）に同じだが平仄の関係で「唱」を用いていよう。「壁蛬」の蛬（蛩）は蟋蟀に同じ。「叢辺怨遠風聞暗、壁底吟幽月色寒」（源順「蛬声入レ夜催」『天徳闘詩合』『和漢朗詠集』巻上・虫三三一『河海抄』巻二）「蟋蟀居レ壁」「蟋蟀懸レ壁」（『玉造小町子壮衰書』）「覚レ寒蛩近レ壁、知レ暝鶴帰レ籠」（「秋晩」『白氏文集』巻五三・二三八一）「夜蛩思二幽壁一、槁葉鳴二空階一」（劉禹錫「臥レ病聞二常山旋師策勲宵過一（下略）」）などと詠まれ、秋夜にわびしさを添える身近かなものとしてよく用いられる。遠くから聞こえ来る鶏の声と身辺の蛬の声という対置と共に、その声の重なりを詠むところに

詩作者は読後の餘情を込めようとするかのようである。

注

（1）『文化科学紀要』（千葉大学文理学部）三輯、一九六一年三月。
（2）『歌びと定家』（笠間書院、昭和六二年九月）。
（3）『語文』（大阪大学国語国文学会）八十・八十一輯、平成一六年二月。
（4）『中央大学国文』（中央大学国文学会）五一号、平成二〇年三月。
（5）本文は群書類従本他諸写本を参看して作成している。また、引用の『源氏物語』本文は小学館の新編日本古典文学全集全六冊（第一冊を①で示し頁（ページ）・行を付すという形式とした）に依る。
（6）猶、『源氏物語』本文の注として『紫明抄』や『河海抄』等の古注に見える記事については必要に応じて触れるが、あくまで漢詩中の語彙・表現に関わるものを中心とする。
（7）「詩語としての「怨」と「恨」――閨怨詩を中心に」（『詩語の諸相』研文出版・一九八一年）。
（8）那波本『白氏文集』（巻一二）などで知られている通常の本文は「孤燈挑尽未成眠」であるが、『朗詠』に見える本文の方が本朝に伝えられた白詩の古態である可能性も皆無ではない。
（9）猶、才学発揮の早さを年令と共に記す中国の例は枚挙に遑ない。今便宜的に『唐才子伝』からほんの少し拾ってみれば、「六歳善二文辞一」（王勃）「七歳能賦レ詩」（駱賓王）「七歳能レ文」（李百薬）「九歳知レ属レ辞」（王維）「九歳工属レ文」（元稹）などと見え、また楊炯のように十二歳で神童科に挙げられたという者もいる。
（10）工藤重矩「平安朝における官職唐名の文学的側面」（『平安朝和歌漢詩文新考　継承と批判』風間書房、二〇〇〇年）参照。

（未完）